グロス・漢ッチェラント

ルシアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グロス・漢ッチェラント

【Ｎコード】
Ｎ０２８７Ｕ

【作者名】
ルシアン

【あらすじ】
滅びつつある国。
それを感じ取った転生主人公だが、不思議と次の時代を自分で切り開こうとは思わなかった。
衰え続ける国家への忠誠を変えようとは思えず、
このまま共に滅びるのもまた一興。

偉大なる王朝の最後の光と共に、
彼はあれるのだろうか。

グロス・漢ッチェラント１（前書き）

この小説には原作と大きく異なる点があります。
大半は無視できると思いますが、

董卓の領地が天水ではなく長安になっている

と言う点のみはあらかじめご了承ください。

あと、「それはとても～」シリーズも連載中ですのでできればそっちも見ていただけると嬉しいです。

グロス・漢ッチェラント1

「祖国万歳！」

「「「「祖国万歳！！！」」」」

シルクロードにあるオアシス都市国家、楼蘭から少し離れた砂漠地帯で、青地に銀の鉤十字が描かれた旗と『燈』の字の書かれた旗が数多翻っていた。

その足元にはついさっきまで生きていたと思われる馬と人の死体が多数転がっており、その死体を踏むような形でそれ以上の数の軍人たちがいっせいに勝ち鬨とおぼしき声を張り上げていた。

直射日光の強い砂漠地帯とあって彼らは鎧の上から白い衣を羽織っていたが、その下には皆一様に青い軍服を着ていた。

「皇帝陛下、万歳！！」

「「「「皇帝陛下、万歳！！！！」」」」

それらの兵士が向いている方向には、騎馬の代わりにラクダに乗った一人の男性がいた。

燐葬、字は立華。

天水の太守にして、滅びつつある帝国に属する将軍でもあった。

グロス・漢ッチェラント１（後書き）

なぜこのシリーズの公開に踏み切ったのか？
それは活動報告を見ていただければ分かるかと…。
私の時間を返せ～。

グロス・漢ッチェラント2

突然だが、私は転生者だ。
と、言ってもよくある話のようにトラックに撥ねられたとか神様に会ったとかという経験はない。
故に、何か能力があるわけでもないし、第2の人生―これこそまさにセカンドライフ―の世界観を知っているわけでもない。
が、どうやら古代中国の天水と呼ばれる地の太守の跡取り息子として生まれたのだという事はしばらくすると分かった。
12で成人の儀を執り行い、古くから共に異民族と戦っている仲だと言う馬家の方々と個人的にも親交を持ち、まれに都へと父と共に赴き、霊帝―今代の陛下―に謁見することもあった。
同時にそれまで自己鍛錬のみだった訓練から、指揮官としての経験も積むように言われ部隊を持つようになった。幼い頃からの友人、まさに竹馬の友であった？徳―字は令明―と共に幾度も異民族と凌ぎを削り、最近では敵からも恐れられるようになってきた。

で、チートが無いから転生者らしいことは何もしていないかと言うとそれは全くもって違う。
と、いうよりも結構好き勝手やっている。能力が無くとも、転生者は生前の知識があるのだからそれを生かそうとするのは当然だ。
しかし、どうも自分の知っている歴史と地理に関しては役に立た

ないことが判明した。？徳の存在で分かるとおり、ここが三国志の時代だと言うことは分かるのだが、無双シリーズと違い、彼は彼女だったのだ！！

意味が分からん！！

しかも字のほかに真名という名前まであるらしい。まるで外人のようだ。

ちなみに私の真名は安樹。？徳の真名は霜華というらしい。

他にも、なぜかすでに鉄が普及していたり、紙が普通に使われていたり、服が、特に下着類が妙に現代的であったり、中国でもありえないような髪の色の少女がいたり、陛下の跡継ぎが二人とも少女だったり、と言うより出会った有名武将の大半が女だったりといろいろおかしい。

そんな中で私は自分の部隊に色を付けた。
生前見たナチス・ドイツ軍に関する資料で、全体主義の部分的使用のメリットをよく知っていたのでそれを軍に用いたのだ。
他にも重装歩兵の武器を槍から新たに作らせた斧槍（ハルバート）に変えたり、父に進言して遊牧以外にも豆を中心とした畑作を行ったりした。

１５になったとき、父が死んだ。
もう少し生きられるかと思ったが、流行り病であっさりと死んでしまった。所詮、三国志の時代の、それも都から遠く離れた辺境の地

の医療技術など無いに等しいのだ。
そんなわけで私が新たな太守となった。
一応都に報告したが、ほとんど勝手に太守の座を世襲したにもかかわらず都側からは何も言われなかった。
陛下の健康が悪化し、宮廷内の政治闘争が激化した悪影響が明白に表れていた。

天水　太守の城
「皆さん、顔を上げてください。」
謁見の間。そこに普段の朝議以上の人間が入り、頭を下げていた。
彼らは新たな太守となった燐葬を侮ってはいなかった。
先代が生きていた頃から、その才の片鱗を見せていたのだ。
「さて、今日いつも以上の人を一時に集めたのには理由があります。」
「私は天水の大改革を行わなければならないと思います。」
ざわざわざわ…
その言葉に多くの人間がざわめく。彼らもまた時代の変革が迫っていることに気づきだしていたのだ。
それはあるいは執務室で都からの書状を読んでいるときであったり、

あるいは都から派遣されてきた援軍と共に異民族と戦っているときであったりした。

脆くなっている。

誰しもが感じていたこと。中央からのデータが曖昧なものばかりとなり、派遣されてきた軍は禁軍のはずなのに妙に弱弱しい。2年前からはついに先代の太守は中央に援軍を頼るのを辞め、親交の厚い馬家と共闘することが多くなった。

「都の、と言うより漢帝国からの恩恵を受けられなくなりつつある今、自力で生き残らなければなりません。そのためにも、まずは食料の増産と軍備の拡大が急務です。李秦、以前私が提案していた畑作を全土で行えるようにしてください。期間は5年とします。

霜華は全軍を私たちの部隊と同じようになるよう、編成しなおしてください。重装歩兵の鎧は以前より頑丈に、軽装歩兵は砂漠でも戦える服装にしてください。

…3年後には外敵以外とも積極的に戦わねばならないかもしれません。」

それぞれの改革を行うにあたっての部下を割り振り、朝議を終わらせた。謁見の間には女官と護衛の兵以外は私しか残っていない。

「黄巾の乱が起こる前に国力を増さないと…。馬家ともこれまで以上の連携が必要だろうし…。」

この国は主権国家ではもはや無いな…。

そう感じざるを得なかった。

グロス・漢ッチェラント3

あれから3年。
急拡大することに成功した天水軍は周辺太守と中央から一目置かれるようになった。
この3年間陛下に変わらぬ忠誠を今後も誓い続けると言う内容の手紙を送り続け、何らかの名目で都に行くときには必ず参内したこともあり、陛下からの信用も高い。
最近陛下の健康は少し持ち直したらしいのだが、変わらずに政治闘争は続いているらしい。
官僚と外戚と宦官。
どちらが主導権をとろうと、陛下に対する忠誠心の低さに変化は訪れないであろう。
最近は禁軍にも政治闘争に加わるものが多いらしく、宮廷内は混沌としているらしい。

「太守様！都より叙任状が！！」
「おお！待ちかねていました。」

18となり、領内の経済事情が好転しだし、軍備の拡大も1時的に落ち着いたこともあり、陛下や知り合った宦官にある願い事をして

いた。

…宦官も全てが私利私欲で動いているわけではないし、私利私欲で動くものは自らの利益に関さないことには特に反対もしないのだから、名声が若干あればある程度のお願いはできる。

「……『天水太守である燐葬を鎮西将軍に任ず』とある。」

「おお、では！」

「うむ、これより軍議を開く。武官を集めよ！異民族どもを征伐する！」

天水の軍は3年前から大きく変化している。

費用を抑えるために素材そのままの色であった衣を青く染め、鎧は輝くような銀色とし、雑然としていた様子を無くした。

陣形の移行の訓練以外では、個人訓練が軍の訓練の主流なのだが、天水では集団戦を意識した訓練を中心に行っている。

小隊ごとに必ず部隊長を設け、中隊からは副官も置くようにした。

給料も悪くは無く、徴兵されたとはいえ家族が養っていけるようにもした。

また、訓練の一環で祖国と皇帝陛下をたたえるようにし、兵舎での集団生活を強制したために連帯意識も強くなっている。

そう、全体主義が採られているのだ。

ゆえに、生きながらにして『死兵』もどきの集団となった。

犠牲をいとわず、勝利と、仲間と家族の生存を重視するようになり、敵前逃亡がほとんど無くなった。

もともと度重なる異民族との戦闘で兵士個々の力は強いのだ。
組織を強固にすれば強力な軍隊へと化けるに決まっている。

「李秦、留守の間政務を頼みます。馬家からも文官の応援が来てくださるようなので、協力して民の笑顔を守ってください。」
「もったいなきお言葉。必ずや太守様の留守、守って見せましょう。
…太守様、交易路の確保を願っております。」
「ははは、改革で金庫をすっからかんにしてしまいましたからね。
交易路を確保・維持し、天水と西涼を潤しましょう。
…霜華、参りましょう。」
「ええ、祖国のために、ね。」

「行くぞ！兵士たちよ！祖国と家族、そして漢帝国の威信を蛮族どもに見せ付けてやるのだ！！」

「「「「「おお～！！！！！」」」」」

揺らめくのは天水軍を示す数多のハーケン・クロイツ旗と『燐』の牙門旗。
その元には騎兵６０００と重装歩兵９０００がいた。
西涼の太守馬騰が治める敦煌を経由し、楼蘭方面まで進出、シルク

ロードの治安と遊牧民による襲撃を減らすことが目的であった。

西涼　太守の城

馬騰のいる城ではいまや大騒ぎとなっていた。
最近めきめきと力を付けてきていた天水の太守燐葬が鎮西将軍に就任し、兵を率いて異民族に奪われているオアシス都市群とシルクロードへ遠征をすると聞いたからだ。

馬家は長らく西涼の地を異民族から守ってきたとはいえ、それは連戦連勝というわけではなかった。
国境である敦煌を失ったことは何度もあり、今は何とか維持しているとはいえ、遠征なぞ夢のまた夢という状況だった。
はっきり言って、天水からの援軍が無ければ敦煌は現在匈奴のものとなっていただろう。

「母様、燐葬が遠征すると言う話、真ですか！？」
「従姉さま、待ってくださ～い！」

そんなこれまでのことを振り返っていた馬騰の元に、娘たちが勢いよく部屋に入ってきた。

「翠、いつになったらお前は大人になるんじゃ。落ち着きを持てと言っとろうが！」

げしっ！という音と共に馬超の額に机の上に置かれていた竹巻が投げつけられた。

「うあ～」という奇声をあげつつ馬超はうずくまる。

「あ～あ、だから言ったのに、従姉さま…。」

心配げに馬超を見ている馬岱もどこかあきれたようである。

「む…。ふむ、そうか、その手もあったな。」

いつまでたっても落ち着きを持たない娘に対して叱った馬騰であったが、何かをつぶやくと考え事を始めた様子であった。

「母様？」

「？」

その様子を、置いてきぼりとなった2人は眺めるしかなかった。

グロス・漢ッチェラント３（後書き）

「それはとても～」シリーズの続きがなかなか書けません。
一度書けたと思った文章のデータは消えてしまいましたし、今から考えるとあれもちょっと納得のいけるものではありませんでした。
まさにスランプです。しばらくはグロス・漢ッチェラントでがんばります。

グロス・漢ッチェラント４

西涼　太守の城　謁見の間

「馬騰どの、この度はわが軍の通行許可、並びに兵站への協力、まことにありがとうございます。」

「よいよい。そのようにかしこまらんでも、燐家と馬家の仲ではないか。それに、異民族の討伐は我々にとっても悲願と言ってもよい位じゃしな。」

「そう言って頂けると幸いです。」

現在私は馬騰どのの城で、今回の遠征への協力にあらためてお礼をしているところだ。
シルクロードへの玄関口にあたる敦煌は西涼太守馬騰どのの管理するところにあり、通行するだけでなく、兵站の維持にまで協力してくれるという馬騰どのには感謝しても仕切れないぐらいであった。

「ところで遠征に１５０００の軍を投入するのは分かったが、領地にはどれほど残っておるのだ？
さすがに1兵もいないと言うことは無かろうが、あまり少なすぎると危険ではないか？」

「はい、一応領地には１５００００の兵が残してあります。今回の遠

征は楼蘭までとしておりますので、大軍は必要ないかと考えました。それに、大軍を養うだけの兵站はおそらく砂漠では難しいかと…。」

「そうじゃのう…。しかし、計３００００の兵を持っておるのか。兵の方も見てみたが、だいぶよく訓練されておるようじゃし…。私は…いや馬家はよい隣人に恵まれたようじゃ。どうじゃ、これからのこともある、より結びつきを強めると言うのは。」

「確かに中央があてにならないですからね…。しかし結びつきを強めるとはどのように？これ以上同盟も友好協定も無いと思いますが…。」

「ふふふ、ぬし、燐葬殿も大人となられ立派な太守となったのじゃ。…うちの馬鹿娘どもと婚約して欲しいぐらいの！」

「それは「えっ！？」…いったいどうしたのです、霜華。」

「いえ、何でもありません。」

「ははは！何でもないのか？主人、いや親友のことを気にするのは結構だが、そのままではいつか奪われてしまうぞ。…特に乱世ともなればなおさらな。」

「？何のことです、いったい。」

「はあ、こればっかりが欠点じゃの…。？徳殿も苦労してそうじゃなあ…。」

「…。」

「何の話ですか、本当に。」

バタンッ！！

そのとき、急に部屋の扉を蹴破るようにして飛び込んでくる人影があった。

「母様！安樹が、いや燐葬がここにいると！…聞、い、て…。」

「何度言ったら分かるのじゃ！いいかげん少しはおとなしくしとれと言うとるじゃろ！
少しは女らしくせんと嫁の貰い手も見つからんぞ！」

「うぐ…。よ、嫁の貰い手なんて…。」

「必要ないとでも言うのか？
…はあ、燐葬殿もおられるからもう言わんが、せめて客人の前ではおとなしくしろ。」

「はい…。
あ、そうだ燐葬で思い出した。母様、私も遠征軍に加えさせてください！北の匈奴に備えが必要なのは分かりますが、それだけでしたら全軍は必要ないでしょう！」

「む…まあそういわれればそうだが…。」

「だったら私も遠征軍に加わります！…天水軍の精強さも知りたいですし…。」

「まあそれならばよいが、あまり兵は出せぬぞ。それから…本当に理由はそれだけか？」

「？」

「燐葬と一緒にいた「わあ～！！な、何を言う気だ、このババア！」ババアとはなんじゃ！」

「ははは…。まあよろしいではないですか。それより翠の軍はどの程度となりそうですか？」

「そうじゃのう…。騎馬３０００といとこかの。こちらもあまり余力はないからの。」

「ありがとうございます。…では翠、出陣の準備をなさってください。明後日にはここを出ますから。」

「はい、すぐにおわらせます。」

そういうと、馬超はすぐに部屋から出て行った。
おそらく部隊の出陣準備に取り掛かるのだろう。

「よろしかったので？西の遊牧民の圧力が消えるとはいえ、匈奴の軍は生半可なものじゃないでしょう。」

「そうじゃの…。だがお主の軍の強さも気になっての。それに、共におれば馬鹿娘も何か思うことがあるやも知れぬ。」

「そうですか…。では。」

「うむ、ゆっくりと休んでいってくれ。疲れては蛮族と戦えなどすまい。」

「ありがとうございます。」

こうして馬騰どのとの協議も終わり、遠征を開始した。

グロス・漢ッチェラント４（後書き）

最近精神状態が軽く鬱っぽい…。
ほっときゃ治るとは思いますが、人生のもろもろにモチベーションが生まれません。
…テスト近いのに……。

グロス・漢ッチェラント5

敦煌を発して3日。
燐葬率いる天水軍はその行く手に武装集団が集まっているのを発見していた。
敦煌の商人から譲りうけたラクダから前方を見ていた燐葬は全軍に戦闘態勢に入るよう指示した。

「五胡のどの勢力かは知りませんが、一族のほぼ全力を出している感じですね。」

「はい、騎兵およそ８０００、軽装歩兵４０００ぐらいかと。」

「日が暮れだしているおかげで重装歩兵が思い通りに動けるのが幸いですね。翠、あなたの方は何か問題ありますか？」

「いや？特にこれといった問題は無いな。水も馬に十分やれているし、気温も下がってきているしな。…ただ、あまり時間をかけすぎると今度は気温が下がりすぎる心配があるが…。」

「それは大丈夫でしょう。それまでに決着を付けます。…霜華、騎兵を率いてもらえますか？私が重装歩兵でまず敵の突進力を抑えますので、敵の突撃が止まったら翠と共に横撃を加えてください。それだけで勝てるでしょう。」

「分かりました。…御武運を。」

「そちらもですよ。…翠、何か質問でも？」

「う～ん、五胡の騎兵はそこらの官軍や賊とは訳が違うんだけど…それでも抑えられるのか？」

「ええ、大丈夫です。そういう訓練をさせていますからね。」

「わかった。じゃあ私から言うことは何もないな。…私も準備をしてくる、負けるなよ。」

「当たり前です。」

シルクロード

日本では絹の道と訳されるこの道は、東は古の都長安から、西は覇権国家の首都ローマにまで最終的に繋がった。

とはいえ、シルクロードは道路らしい道路として繋がっているわけではない。

特に砂漠地帯にまともな道を作れるわけがなく、ただ隊商が持つ独自の地図に記されたオアシス都市間をつないだ概念的なものでしかなかった。

そして、その概念的な道の覇権を握るだけで莫大な富を得ることができるのであった。

現在燐葬率いる軍と五胡の率いる軍は互いに別の砂丘の上に隊列をしていた。

基本的に統一された軍装を装い、高度な訓練を積んできた天水・西涼軍がその精強さを無言のうちに示しているのは当然として、五胡の軍勢も装いこそばらばらなものの、戦いなれた軍特有の得体の知れない何かを放っていた。

と、天水軍の奥の方から戦場には不釣合いな調べが響き始めた。

天水軍は燐葬の軍事改革の一環で、世界でもおそらく初めてであろう軍楽隊を所有していた。

この時代の漢ではどこの勢力を探しても軍隊が所有する楽器は合図用の陣太鼓のみだが、燐葬はそれに加えて弦楽器や原始的なラッパを用いさせていた。

戦場に響き渡るその調べは
戦の前としてはあまりふさわしくないように思われる
神秘的な調べであった

初めて聞く現象に思わず聞き入っていた五胡軍であったが、曲の終わりと共に聞こえてきた天水軍の喚声に我に返った。

「「「「「「祖国万歳！！！！」」」」」」

「「「「「「皇帝陛下万歳！！！！！」」」」」」

「「「「「「燐葬様千歳！！！！！」」」」」」

その掛け声と共に燐葬が直接率いる重装歩兵部隊が砂丘を下り、前進を開始した。

五胡の族長はその整然とした前進に圧迫感を覚えたが、その思いを振り払う勢いで命令を下した。

「軽装歩兵部隊前進！！敵歩兵を食い止めろ！騎兵隊、敵両側面から攻撃を仕掛けよ！本陣には２０００のみ残せ！！」

武装の軽さを生かして砂丘を勢いよく駆け下りる五胡軍。

その勢いは一瞬重装歩兵部隊の前進を食い止めるも、すぐに武装と数の差から勢いは止められてしまう。

一方五胡自慢の騎兵部隊も、天水軍両側面に展開していた霜華と翠の騎兵部隊によって前進を止められてしまった。

こちらは数で劣っているものの、五胡の方がさすがに若干優勢であった。

とはいえ、とてもではないが歩兵の援護はできそうにもない。

戦いが始まってしばらくすると、五胡軍の劣勢は明らかになり始めた。

「陣を密に！訓練どおり連携して確実に敵を殲滅しなさい！！」

戦場のちょうど真ん中にある歩兵の戦闘では、天水軍が圧倒的に優勢になりつつあった。

分厚い鉄製の大たてを前面に出し、一糸乱れぬ動きでハルバートをいっせいに盾の隙間から振り落とす重装歩兵に、五胡軍軽装歩兵部隊は手も足も出なかった。

そもそも軽装歩兵部隊が好む戦いは投げ槍を最初に投げ、敵がひるんだ隙をついて食い込む戦いであり、投げ槍を投げられても平然としている重装歩兵部隊とガチンコで戦って勝てるはずがなかった。

ジリジリと後退する戦線。

五胡の族長は負けを認めざるを得なかった。

（おかしい、最近の漢民族は国力の低下と共に弱っていたはず。なぜここまでに精強なのだ？）

族長の中で渦巻く疑問は、しかし解決できそうになかった。

「…しかたない、撤退する！本陣守備の２０００を殿軍に、撤退せよ！！」

もともと戦って奪い取った捕虜で構成されていた歩兵部隊は置き去りに、五胡軍は撤退を始める。

燐葬としては追撃をかけたいのだが、捕虜を放っていくわけにも行かず、仕方なく戦闘を打ち切った。

「我々の勝利だ！勝ち鬨をあげろ！！」

「「「「万歳！！！」」」」

「「祖国万歳！！」」

「「「「燐葬様万歳！！！！！」」」」

遠征の初戦は大勝利であった。

グロス・漢ッチェラント６（前書き）

遅れてすみません。
とりあえず、死んではいません。

グロス・漢ッチェラント6

初戦の勝利から3週間経ち、その後も連勝を重ねた天水軍はついに楼蘭へとたどり着いた。

１８０００いた軍は１４０００へと擦り減ってはいたが、それでも遠征は大成功と言え、楼蘭では久しく見なかった宗主国の軍に喜びを見せていた。

楼蘭　都市長の館

「…それではこれからの交易路は異民族が担ってくれると？」

「あくまで今回の遠征を経て交渉できた部族のみ、ですけどね。それに、毎年彼らには決められた金額を支払わなければいけません。」

「それは、朝貢に近いのでは…？」

「いえ、朝貢では独立は認めてもらえども交易路の護衛まではしてもらえません。今回の形では我々が異民族を金で雇ったと言う形になります。ですので、一応主人は我々の側です。」

「なるほど。…分かりました、ありがとうございます。」

「いえ、こちらとしては宗主国としての義務を果たしただけです。…これからも朝貢国として漢王朝に忠誠を誓うように。」

「ははっ。」

交渉、というか今後の交易路の治安維持や西涼、天水との貿易に対する取り決めを終えた燐葬は、すでに日の暮れた外へと出て、城壁へと向かった。

ｓｉｄｅ霜華

街を見渡すと、そこいらじゅうで青い衣を着た天水軍の兵士たちが浮かれ騒いでいた。

敦煌から少し離れただけなのに、この街はその性質上、天水の街と比べて大きく、人も多く、そしてどことなく異国情緒を漂わせていた。

だからこそ、彼らは興奮しているのだ。

祖父やその更に父が寝物語に自慢した異国への遠征。
帝国一の将軍に率いられ、西へ西へと、立ちはだかる異民族共を次々と打ち破る。
たまに見つかる朝貢することを誓ったオアシス都市では、見たこともない酒を飲み、異国美人の女を抱き。
戦が終わって帝国へと戻ればたくさんの報奨金が貰える。

そう、天水、西涼は恵まれた土地だったのだ。
だが父の代、いや祖父が兵役を終える頃から状況が変わりだした。
関の向こうは宝の山ではなく、恐ろしい異民族共の支配する地となってしまった。
都から来る将軍も、生え抜きの大将軍様ではなく、政治闘争に負けてまわされた弱弱しい将軍のみとなってしまった。
それどころか、滅多に将軍が来ることがなくなった。

父は、いつか祖父のように西へ行きたいと夢見て死んだ。
その夢を、燐葬様と共にかなえたのだ。

ふと、霜華は燐葬が見当たらないことに気づいた。
すでに都市の代表とは話が付いているはずだ。
どこに行ったのだろうかと霜華は友を探し始めた。

楼蘭　城壁の上　　ｓｉｄｅ燐葬

城壁の上に登ってみると、そこからは月がよく見えた。
大きな満月で、その光の反射によって白銀色に見える砂漠とあいまって、それはとても神秘的に見えた。
ふと、唐突に自分がこの世界の人間とは異なることを思い出した。
自分は、自分だけがあの月に行けるようになるまで１８００年かか

ることを知っているのだ。

この体になる前に自分がどのようなことをしていたかはもう覚えていないが、恐らく月には行ったことはないはずだ。

それでも、なぜか無性に月が懐かしくなった。

もしかしたら、世界でただ一つとなってしまった２０００年代の人類としての共有体が寂しくなって自己主張を始めたのかもしれない。

「この世界で私だけが、月に行ったことのある人類なのだ」と。

ｓｉｄｅ霜華

遠くから城壁の上に立つ安樹の姿が見えたので、何をしているのか疑問に思いつつも城壁へと向かった。

階段を上り、少し気になったのでそっと顔のみを出して安樹の様子を盗み見る。

安樹は月を見ているようだった。

ここまで来るまでに死んでいった兵を悼んでいるわけでも、鎮西将軍としての任を全うした感慨にふけっているわけでもなく、何かを懐かしんでいるかのような目をしていた。

安樹は月に何を見ているのだろうか。

私には全く分からなく、その事が胸を痛ませる。

安樹の一番の理解者である自信が今まではあった。

だが、今の安樹が何を考えているのかが分からない。

なにより、今にも消えそうな安樹の雰囲気が耐えられず、つい彼の元に走り、抱きついてしまった。

ｓｉｄｅ燐葬

「安樹！」

月を眺めつつ前世の世界を懐かしんでいると、突然声と誰かが自分の背に抱きつく感触を感じた。

振り返ると普段は凛々しい顔つきをしている霜華が目に涙を浮かべて私の背中に抱きついていた。

「どうしたんですか、霜華。」

尋ねるも、霜華は抱きしめる腕に力をこめるのみで何も答えてくれない。

「……。」

だが、こちらの口を噤ませてしまうような何かを感じさせていた。

何かが、彼女を非常に不安にさせたようだ。

「…安樹は、何を見ていたんだ？」

ようやく口を開いた彼女から聞かれた質問は、少し抽象的であった。

「…安樹は、月に何を見て、何を懐かしんでいたんだ？
なぜ、そんなにも遠くを見ているんだ？
安樹の故郷はそんなにも遠くにあるのか？
天水ではないのか？

…安樹の故郷はどこにあるんだ？」

堰を切られた水のごとく流れ出す霜華の質問に、思わず考え込んでしまった。

私の故郷はどこなのだ？

帰る場所は天水だ。

すでにこの肉体を手に入れている以上、元の世界に戻れるとは思えない。

だが、私にとってよりどころとなっているのはどこだ？

本当に天水なのだろうか？

それとも、

あの月と重ね合わせてしまった元の世界なのだろうか？

グロス・漢ッチェラント６（後書き）

忙しい、ああ忙しい。そんな近況下、とりあえず作りました。若干鬱なルシアンの精神状態が反映されていますが、最終的にどう纏めるのか…。うむむ。

グロス・漢ッチェラント7（前書き）

いい加減本編に突入させたいのですが、もう少しかかりそうです。

グロス・漢ッチェラント7

「…私は、私の故郷は霜華の知っている通り天水です。」

「…「だがっ！」ですが、心の中に浮かぶ故郷はここではありません。」

「？どういうことだ？」

「私は、この世界の人間ではないということです。」

そう言った私の言葉を聞いた霜華は呆けた表情をしていた。
だがその表情もすぐに終わり、変わって彼女は怒った表情をした。

「馬鹿にするな！私は本気で「本気で言っているのです。」…え？」

「霜華の知っている通りこの体は先代太守の息子として生まれたものです。ですが心は、記憶は違います。」

「私は、いえ私たち人類は『月へ行ったものたち』です。」

「月へ行き、都市を作り、人が住み、この大地と行き来する。そんな世界。私はその世界の民でした。」

「どのように死んだのかも覚えてはいませんが、確かにその世界で暮らしていたのです。」

一気にしゃべり終え、霜華の様子を見てみるといまだに把握し切れ

ていないようであった。

「…えと、じゃあ、安樹は月の民…だった？」

「いえ、正確には違います。私は地球生まれの地球育ちで、成人してからは国際宇宙ステーションＳ１に勤務していました。」

「こ、こくさいうちゅ…？」

「ええ、簡単に言えば月と地球―この大地のことですが―の間にいました。」

「月と地の？」

「ええ、月と地の間です。」

「そ、そうか…。（安樹はもともと月からの使者だったのか）そ、それでなぜ安樹はそんな大変なことを私に？」

「霜華が始めに問いただしたのですが…ですが、あなたになら私の秘密も預けられるでしょうし、それに…」

「それに？」

「この地へ来て、ふと月を見上げたときに無性に寂しくなったのです。自分がただ1人だけの孤独な存在になってしまったかのように感じて。「私が！」…？」

「私はいつも安樹の隣にいる。だから、…だから寂しいなんて言わ

ないでくれ。」

「霜華…。」

「例え何があろうと、天水や漢王朝を敵に回すことになっても、絶対に隣にいる！だから、だから私と一緒にいてくれ！！」

霜華の必死な、だからこそ心の篭ったその言葉にとても心が暖かくなった。孤独感が消え、幸福感が増し、そして、霜華への思いがつい言葉となってあふれ出ようとしたその時…

「「「「「「「わぁーーーーーー！！！！！！」」」」」」」

「さすが将軍！」「お幸せに！」「畜生、俺もあんな嫁さん欲しい！」

城壁の下から大勢の兵士に叫ばれた。

街で城の次に高い建物から大声で告白すれば、周りに丸聞こえなのは当たり前だった。

「お、お前たちいつの間に！？」

「あの、まだ返事をしていないのですが…。」

「？徳様にあれだけ言われて、断るっていうんですか！？」

「そいつぁー男の風上にも置けないってもんでさー。」

「く、霜華、私と共に生きてください。死が私たちを別れさせるときまで。」

「わ、分かりました。喜んで。」

そう2人で約束を交わすと、兵士の歓声は更に大きくなった。

楼蘭の地で私は親友が1人減り、生涯の伴侶を1人得ることができた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0287u/

グロス・漢ッチェラント

2011年8月5日11時54分発行